

研究課題	プールに入ることなく泳技能を修得させることができる 遠隔型水泳指導法の開発		
氏名	森山 進一郎	所属	芸術・スポーツ科学系
		職名	准教授
APRIN e-ラーニングプログラムの受講 ☒ ←受講済の場合はチェックをすること			
【研究成果の概要】（文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度） 【背景および目的】 2020年4月にコロナウィルス感染拡大対策としての緊急事態宣言が発出された影響から、日本各地の学校で水泳の授業は中止となった。水泳授業の意義は国内外でみても泳力や自己保全能力の獲得であることから、コロナ禍でも、児童・生徒の水泳学習の深化を目指すことは、昨今の学校教育関係者と水泳研究者にとって、焦眉の急となる課題の一つといえる。 また、泳ぐことが困難な状況における水泳授業の進め方・あり方に対する検討は、コロナ禍対策以外の課題解決にも波及する。例えば、障がいを含む、身体的な問題等によって、プールでの実技に制限のかかる児童・生徒の水泳授業に対する取り組みを変えるきっかけとなるかもしれない。 本研究では、教員養成系大学においてプールに入ることなく行ったオンライン型水泳授業の有用性を検証し、泳ぐことが困難な状況下において活用できる水泳指導法の資する知見を得ることを目的とした。 【方法】 参加者は、保健体育の教員免許状取得を希望している学生102名（男子58名、女子44名）とした。全ての学生に対して口頭にて説明し、参加者となることに同意を得た。指導者は、水泳を専門とする大学教員とし、指導補助には水泳研究に取り組む3名の大学院生が参加した。授業は13回のオンライン型とし、同時双方向およびオンデマンドにて行った。泳法指導は、WEB上に掲載されたコンテンツを参加学生が視聴し、その後学生から提出される課題動画についてあらかじめ作成した評価表を用いて指導者および指導補助者が評価をして全学生にフィードバックを行い、その後適宜質疑に回答する形で技能向上を主たる目的として実施した。さらに、知識および指導法を習得させるために、各泳法等に対する指導上の留意点と思う点についても、指導前後で比較するために自由記述により500文字以内でまとめさせ、提出させた。 【結果および考察】 各泳法における指導前後の観察的評価は、取り組んだすべての課題について有意に改善した（$p < 0.001$）。また、指導における留意点は、具体性が増したり項目が増えたりした。以上の結果は、オンライン水泳授業の有効性を示唆している。すなわち、コンテンツとしてあげた見本となる動画に加え、自身の動作を繰り返し確認することで、確実に狙いとする技能の改善が認められた。中には、「プールでは、浮く、呼吸する、といった動作に必死になってしまうが、エアスイムでは安定した地面でおこなうためにその心配がなく、純粋に泳動作の修得に意識を向けられた」という意見も見られた。この反面、「水の感覚がわからない」、「水中で試せないから、効果がわからない」といった至極当然とも言える意見もかなりの比率で見られた。指導における留意点の変化には、参加者各々が授業内容を咀嚼することで、変化が認められたものと考えられる。 【結論】 泳がない水泳指導は、水泳に関する知識の修得と各泳法などの細かな技術を改善させる点で、教員養成を意図した水泳授業の手段として活用できる。 【研究成果発表方法】 本研究の成果は、2020年度日本水泳・水中運動学会年次大会にてすでに発表し、ヤマハ最優秀論文発表賞を受賞した（大学HP掲載済）。さらに、この受賞を受けて、日本水泳連盟の機関誌である「月刊水泳」への寄稿依頼を受け、すでに発刊された（2021年1月号p.22-23）。現在は、査読付き学術雑誌への投稿に向けた準備を進めている。また、2021年度授業でも実践を継続して、国際学会での発表も視野に入れている。 今後は、各種講演や免許状更新講習などでも積極的に発信していく予定である。			

※発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入すること。

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。